

アパカバール 懐かしのジャカルタ
2006, 8, 19 岡山市立甲浦小学校 服部 誠

10年ぶりの第2のふるさとジャカルタは、まさにインドネシアらしく・・・

数年前から旅行者にもビザが必要になっており、その購入のため、スカルノハッタ空港到着後イミグレ（入国検査）の前で長蛇の列ができていた。2機の飛行機が降り立っていたため、百人以上の列。ビザを受け取り、チェックする人は2人。ゆっくりと、ていねいに？チェック。（日本なら出てくる人数を想定して窓口を増やす。それを特にしないのがここインドネシア）急いでいる人は警備員？にかけより交渉。（ここから先は文章に残せないの想像してください。） イミグレにたどり着くまでに1時間20分。もう、くた。でもここで怒っていたら、ここに来る資格がない。日本人のモノサシをここで使うことはいけない。ホテルの出迎えの係が待っているはずなのに、見あたらない。キョロキョロしていると、何人もの人が声をかけてくる「タクシータクシー？」と（それもかなりしつこく）。インドネシア旅行が初めての人だと、パニックになる。探すことはあきらめて（普通はあきらめない）メータータクシーでホテルへ。

さて、10年間でどんな変化が見られたか・・・・・・ メイン道路（ジャランタムリン・スティルマン）にバスレーンができていた。毎日の壮絶なマチュット（ラッシュ）の解消のためか。地下鉄のような雰囲気、エアコン付き、車掌付きの専用バスが次々と走る。3500RP（約40円。）低所得層の人にはちょっと高い。拡大しつつある中層の人がターゲット。金持ちはバスなど乗らない。このバスレーンは、車を持つ層にとっては迷惑なもの。よく作ったものである。これでもかというくらい、高級なショッピングモールがたくさんできているが、金持ち（車を持つ層）のためだけのもの。90%の人々には何の関係もない。バスレーンを作ったことには民主化が進むインドネシアの象徴かもしれない。（独断である。）

巨大なビルが増えている。10年前の倍くらいになっているかもしれない。しかし、庶民のくらしはほとんど変わっていないように思える。物売りの人、バジャイ（3輪タクシー）のおじさん、ミンタ ウアング（物乞い）のおばさん、家庭のメイドさん達・・・何も変わっていない。そういえば、携帯電話の普及は日本のようにすさまじい。もちろん、限られた人達ではあるが。それでも中層の人達ももっていた。メイドさんの中でも持っている人がいるようだ。

話がもどる。何が楽しみでジャカルタへきたか。ラグラグ会（インドネシアの歌を歌いながら、交流する男性グループ）への参加、メンバーとの再会である。思い出の仲間達が一席設けてくれた。ジャカルタ赴任時代の思い

出の宝箱が一つ一つ開けられるようであった。語り合うたびに、思い出が輝きを増す。充実していた3年間を今なお、誇りに思う。そして、支えていただいた多くの人への感謝の気持ちが増す。

トビン先生(もとJJS(ジャカルタ日本人学校)の先生。こちらにお嫁に来ている。)にもお会いすることができた。退職され、ゆったりと過ごされている。在留日本人の生活や考え方が変わってきたと聞いた。当時、インターネットもなく、NHKも見ることができず、新聞をとっていなかったし、携帯電話も手に届くモノではなかった。安全なマンションでなく、一軒屋に住んでいた。安全面にしても、仕事にしても、遊びにしても、必然的に、人との関わりが今と異なる。目で見える付き合いが必要であった。日本の情報がほとんど入ってこなかったのも、日本に気持ちが向いていなかった。インドネシアに住んでいる、日本ではないという意識の元で、積極的にインドネシア理解・交流ができた。今でもよかったと思っている。誤解しないでいただきたいが、今の派遣の方々を批判しているのではない。与えられた状況が異なっているだけである。情報豊かな今の方が、濃い交流ができた。深い理解ができていられるかもしれない。とにかく、人の家に集まるが多かった。部屋が大きかったこともあり、正式なペスタ(パーティ)も多かったし、何人か声をかけるとすぐ、誰かの家に集まったりした。ゴルフコンペも多かった。(ラグラグコンペが今無いと聞いてびっくりした。)音楽会も多かった。今は好む好まざるでなく、あまり集まることも無いと聞く。(非常に限られた情報なので、断定的に書くと問題があるが)情報もいっぱい入り、楽しみの種類も増えたようだ。人との関わりの必要感が薄れているように思う。ラグラグ会もJJS(ジャカルタ日本人学校)も、社会の変容とともに変わってきている。それぞれのラグラグ会、それぞれのJJSでいい。思い出の輝きは、瞬時のものであり、永遠のものではない。

10年間、変わっているようで変わらないジャカルタ。一番変わったのは日本人かもしれない。社会的格差も広げつつ、人権面や環境面に問題を残しながらも、したたかに発展していくジャカルタ・インドネシアにあらためて敬意を表したいと思う。

思い出の宝箱を、また、しまっておこう。



